オピニオン

うみなり

投書欄

フィジー語のアルファベット

中島 洋

去る五月十四日、フィジーでクーデターが発生した。四月の総選挙で労働党と国民連合党との野党連合が勝ち、インド人系色の強い革新政権が誕生したことに對して、ランブカ中佐の率いるフィジー国軍の一部が決起したわけである。

もともとフィジーのインド人は、百余年前に英国人が砂糖キビ農園で働かせるために連れてきた人たちの子孫で、いまやフィジー人口の四十九%を占めるが、共同通信の斎藤達雄氏によれば、最初のインド人契約労働者四百六十三人が連れてこられたのは、一八七九年の奇しくも五月十四日であったという。

さて、このクーデター発生後のフィジー事情を追って、日本の各紙の朝夕刊に目を通して見たが、普段は太平洋洋島嶼諸国に関心の薄い各紙も、やはりクーデターともなると、さすがに日々記事を書き載せていた。しかし各紙ともなにが起こり、どのように推移するのか、なにもわからぬままに記事を書き載せているような印象を受けた。

五月二十一日の毎日新聞朝刊は、「光った英女王の決断」と見出しをつけ、英女王の軍政権不承認の方針により、ランブカ中佐がクーデターの継続を断念したという、ロンドン特派員の奇妙な記事を書き載せ、逆に翌日の朝刊では「ランブカ中佐が「実権」と「事実」を報道した。朝日新聞は、騒動が一段落した五月二十五日頃、シドニー特派員をスバに派遣したが、せっかく現地に飛んだ特派員も主要な人物には会えなかったようで、タクシーの運転手の話などを載せてお茶を濁していた。

日本の新聞が軒並み駄目だったのに対し、米誌『タイム』は、かなり程度の良い記事を書き載せていた。またインドネシアの週刊誌『テンプ』に載った同誌東京特派員による記事は、『タイム』のよりさらに良かったとの説もあるが、私はインドネシア語は読めないの、なんともいえない。

ときに、朝日を除いて、ほとんどの日本の新聞が間違えたのは、ランブカ中佐とババンドラ前首相の名前の読みで、それぞれラブカ、ババドラとした社が多い。

フィジーのアルファベットは、英国系メソジスト派の宣教師団(主として David Cargill)がつくったもので、基本的には h, j, z の

三文字が除かれており、さらに、b, c, d, g, q を mb, thy, nd, ng, ng と発音することになっている。つまり Rabuka は Rambuka のように、Bavandra Mbavandra のように発音するのである。したがって、ランブカ中佐の日本語表記としては、ラムブカのほうが正しいともいえる。

なお、g の場合は、singer の ng ように、q の場合は、finger の ng のように発音することになっており、日本人には、ちょっと区別ができればいい。

なお、サモアでは g を ng と発音するし、クック諸島では h を発音しないなど、国や島によって、表記と発音の間に、それぞれ法則や慣習があるので注意すべきである。

環礁諸国は沈むのか

前号の本欄で安楽正照氏は、『島は沈むのか? ツバル海岸線の浸食』と題して、赤道付近の太平洋水域の海面上昇現象を述べておられました。スバで発行されている『アイランズ・ビジネス』誌の四月号の表紙には、『環礁諸国は沈むのか、それとも泳ぐのか?』というショッキングなタイトルが掲げられています。

掲載された記事によりますと、南太平洋環